【原著】

個別大学の追跡調査に関するレビュー研究

西郡大（佐賀大学アドミッションセンター）

本研究では,『大学入試研究ジャーナル』にこれまで掲載された論文を対象に,追跡調査に限定したレビューを実施した。レビューの視点は,①「どのような分野(学部)で主に行われてきたか」②「どのような入試方法が分析の対象になったか」③「入学前および入学後の情報としてどのような指標が分析に用いられたのか」④「代表的な分析結果」である。その結果,すべての大学や学部で汎用的に使用可能な追跡調査の方法や共通的に援用できる分析結果は,ほぼ存在しないことが示されたものの,新たな視点として,入学後教育における教育的活用を前提とした追跡調査のあり方の重要性が示唆された。

1 はじめに

平成 3 年に,国立大学入学者選抜研究連絡協議会から『大学入試研究ジャーナル』の創刊号が発刊され,2010 年 3 月で第 20 号という節目を迎えた[1)]。その間,390 本の論文が掲載され,多くの知見が蓄積されてきた。特に,入試方法[2)]の妥当性や信頼性を検証するような調査および研究は,この 20 年間,継続的に報告されており,入試研究の中心的なテーマであるとみることができる。こうした入試研究の最も一般的な方法として,入学者の「追跡調査」が挙げられる。林ら(2008)の調査からも,各大学で実施されている入試研究の中心が追跡調査であることが看取され,各大学が実施している入試でアドミッションポリシーに則した学生を選抜できているかどうかという点に重きが置かれている実情がうかがえる。

しかし,追跡調査に関する研究がこれまで数多く蓄積されてきたにもかかわらず,それらを整理した研究は管見の限り,多いとは言えない[3)]。特に,入研協の構成員が短いサイクルの間で入れ替わってきたという状況(倉元,2008)を踏まえれば,各大学で入試方法等を検討するような学内委員に任命された者にとって,入試研究の中心とも言える追跡調査のレビューが見当たらないのは心許ないことであろう。

そこで本研究では,『大学入試研究ジャーナル』の創刊号から 20 号までに掲載された全論文の中から,追跡調査に関して報告されたものを抽出し,整理することにした。

2 方法

2.1 追跡調査研究の抽出条件

各大学における追跡調査の形態は様々であるため,入学者における入学前の情報と入学後の情報の 2 つの指標を用いて検討された報告に限定した。したがって,対象者の入学前および入学後の情報のどちらか 1 つでも欠けているものは対象外である。

2.2 抽出論文のレビュー方針

抽出論文は，以下の 4 つの視点から整理した。①「どのような分野(学部)で主に行われてきたか」，②「どのような入試方法が分析の対象になったか」，③「入学前および入学後の情報としてどのような指標が分析に用いられたのか」，④「代表的な分析結果」である。

3 結果

3.1 抽出論文の概要

創刊号から 20 号までに掲載された全論文(コメント論文は除く)390 本の内，31%に当たる 121 本の論文が抽出された(表 1)。各号において平均的に 4，5 本の論文が追跡調査に関するものとして掲載されている。なお，これらの数値は，のべ数であり，同じ著者が毎年，継続的に行っている追跡調査も含まれる。

表 1. 発刊号別にみた抽出論文の内訳

No	抽出数	総数	No	抽出数	総数
1	5	10	11	5	17
2	3	13	12	7	17
3	9	13	13	4	17
4	6	14	14	5	24
5	7	18	15	5	23
6	10	17	16	7	27
7	8	14	17	6	33
8	6	15	18	7	28
9	6	13	19	6	30
10	5	13	20	4	34

3.2 分野別（学部系統別）にみる特徴

表 2 に示すように，学問分野別でみると医学系が最も多い。その理由として，医師国家試験という当該分野の共通目標や医師としての資質を評価する必要性といったことが，追跡調査の動機となっていることが考えられる。特に，医学系の単科大学において報告が多く見られた。その次に多いのが，理学および工学系の学部であり，専門教育を理解するためには，専門基礎分野における知識修得や基礎的な理解の積み上げが必要とされる学問分野とみることができる。

表 2. 分野別にみた抽出論文の内訳

分野別	件数	分野別	件数
医学	38	体育	2
理・工学	26	工芸繊維	2
全学共通	19	教養	1
複数学部	16	経済	1
情報	6	歯学	1
教育	5	薬学	1
看護	2	その他	1
	合計	121	

3.3 入試方法別にみる特徴

図 1 で示すように，入試方法を限定した追跡調査もみられ，特に，推薦入試，AO 入試を対象にしたものが多い。推薦入試は，1990 年代前半に，比較的多く見られ，2000 年代でも多くはないものの散見される。一方，AO 入試は，AO 入試を導入する大学が急激に増加した「AO 入試元年」(鴫野,2003)とも呼ばれる 2000 年以降に多く見られる。「その他」には，連続方式，分離分割方式などの一般入試に加え，3 年次編入学や二次募集入学，大学独自で開発した入試方法などの特別入試が含まれる。

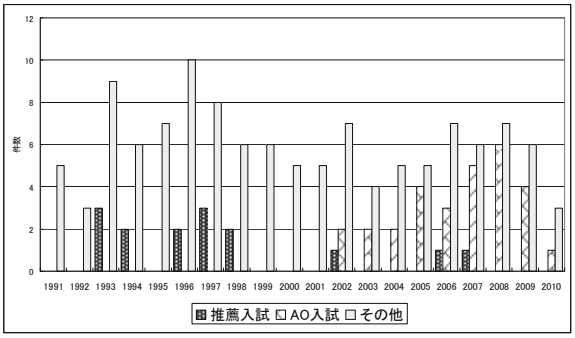

図 1. 入試方法別にみた抽出論文の内訳

3.4 分析に用いられた指標

入学者における入学前の情報と入学後の情報の2つの指標について,前者を「指標Ⅰ」,後者を「指標Ⅱ」として,その内容を整理した。具体的には,抽出された論文で用いられている分析指標を分類し,同じような性質を持つ項目についてカテゴリー化した。その内訳は表3に示すように,「指標Ⅰ」が9つ,「指標Ⅱ」が11つの指標からなる。各指標の右部分に記載されているものは,具体的にどのようなものが該当するのかを示している。

「指標Ⅰ」と「指標Ⅱ」に該当する項目の関係性を中心に分析している論文が,本研究における抽出条件である。そのため,どのような指標の組み合わせで分析が行われているのかをみるために,指標ⅠおよびⅡに含まれる各指標について,全体のクロス表と分野別のクロス表を作成した(表4)。同クロス表において数値が大きいものが,これまでに数多く行われてきた追跡調査であるとみなすことが出来る。なお,1つの論文で,指標Ⅰに「入試区分」「入試成績」,指標Ⅱに,「入学後学業成績」「卒業後進路」といった複数の指標を用いて分析しているものは,のべ数をカウントしている。

表3. 入学前情報の「指標Ⅰ」と入学後情報の「指標Ⅱ」の整理

指標Ⅰ		指標Ⅱ	
入試区分	前期日程,後期日程,推薦入試,AO入試など	入学後学業成績	教養教育,一般課程教育,専門教育等の修学状況(取得単位数やGPAの成績等),教育実習参加資格など
入試成績	個別試験(学力検査,小論文,面接試験,実技試験,総合問題,独自入試方法),共通試験(共通一次試験,大学入試センター試験),面接試験の評価,配点比率の影響,各種統計指標(科目間相関,評価方法間の相関,合否入れ替わり率等)など	(アンケートやヒアリング調査等による)学生の意識・活動等の調査結果(学生生活の意識調査)	大学生活や課外活動等の満足度および不満,入学後の活動履歴,学生自身の自己評価,授業の理解度,留学経験,教員との交流,入学前後のギャップ認識など
		医師国家試験の合否	合格率や不合格者など
高校成績	調査書,各科目の履修成績,推薦書など	卒業後進路	大学院進学率,就職先企業形態(民間,公務員など),教員採用試験の状況など
属性	性別,現浪(年齢),出身地域,高校種別(普通科,専門系)など	留年	進学率,卒業率など
高校での活動実績	出席日数,課外活動(部,クラブ活動),高大連携活動への参加有無など	教員による評価	指導教員による学生の評価
		卒業研究の評価	卒業論文および卒業研究の評価など
高校での履修状況	選択科目において何を選択していたか(特に,理科)	ドロップアウト	休学者,中途退学者,除籍者など
入学時認識	志望動機など	卒業後活動状況	卒業後所属機関の担当者による評価,卒業後の所属機関での活動など
入試状況	センター試験の全国平均点,受験競争倍率など	独自指標	大学独自開発の指標
入学前教育	入学前教育の有無	その他	履修パターンや入学後コース選択,大学院入試の成績,共用試験の成績,就職面接(学内模擬面接の評価),学生のピアレビューなど

表 4. 全体および分野別にみた指標Ⅰと指標Ⅱの関係

分野	指標Ⅰ	指標Ⅱ ①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	合計
【全体】	入試区分	63	16	4	9	6	6	2	3		2	4	115
	入試成績	57	5	8	3	6	3	3	3	2	2	4	96
	高校成績	25	1	4	5	2	2	2		2		1	44
	属性	10	1	3	3	3	1	1		1			23
	高校での活動実績	7	3	2	1	1	1	1	1			1	18
	高校での履修状況	4	1			1			1				7
	志望動機	1	2		1			1					5
	入試状況	1		2									3
	入学前教育	1											1
	合計	169	29	23	22	19	13	10	8	5	4	10	312
医学	入試成績	21		7		5			2	2	2	1	40
	入試区分	11		3		4	1		2		1		22
	高校成績	9		4	1	1				2			17
	属性	7		3	1	3				1			15
	高校での活動実績	4		2		1			1				8
	高校での履修状況	4	1			1			1				7
	入試状況	1		2									3
	小計	57	1	21	2	15	1		6	5	3	1	112
理・工	入試区分	21	6		3	2		1	1		1	1	36
	入試成績	6	3		1		1	1					12
	高校成績	4			2	1	1	1					9
	高校での活動実績	2	2										4
	入学前教育	1											1
	小計	34	11		6	3	2	3	1		1	1	62
全学共通	入試成績	13				1			1				15
	入試区分	1	1		1								3
	高校成績	3											3
	志望動機		1										1
	属性	1											1
	小計	18	2		1	1			1				23
複数学部	入試区分	7	6	1	1		4					1	20
	入試成績	4	1	1	1		2	1				2	12
	高校成績	3	1		1		1	1				1	8
	高校での活動実績	1	1		1		1	1				1	6
	属性	1			1		1						3
	小計	16	9	2	5		9	3				5	49
教育	入試成績	3	1		1			1					6
	志望動機	1	1		1			1					4
	属性	1	1		1			1					4
	高校成績	2											2
	入試区分	1					1						2
	小計	8	3		3		1	3					18
情報	入試区分	5	1		1								7
	入試成績	4										1	5
	小計	9	1		1							1	12
看護	入試成績	2											2
	入試区分	1											1
	小計	3											3
体育	高校成績	1											1
	入試区分	2	1		1							1	5
	入試成績	1											1
	小計	4	1		1							1	7
工芸繊維	入試区分	2											2
	小計	2											2
教養	高校成績	1											1
	入試成績	1											1
	小計	2											2
経済	入試区分	1											1
	入試成績	1											1
	小計	2											2
歯学	入試成績	1											1
	高校成績	1											1
	小計	2											2
薬学	入試区分	1			1								2
	高校成績	1			1								2
	小計	2			2								4
その他	入試区分	1	1		1			1				1	5
	小計	1	1		1			1				1	5
	合計	164	29	23	22	19	13	10	8	5	4	10	307

【指標Ⅱ】
① 入学後学業成績
② 学生の意識・活動等の調査結果
③ 医師国家試験の合否
④ 卒業後進路
⑤ 留年
⑥ 教員による評価
⑦ 卒業研究の評価
⑧ ドロップアウト
⑨ 卒業後活動状況
⑩ 大学独自指標
⑪ その他

全体的な傾向として,指標Ⅰで一般的に用いられてきたのは,「入試区分」,「入試成績」,「高校成績」であり，指標Ⅱでは「入学後学業成績」である。これらの分析の中心は,入試区分別にみた入学者の入学後学業成績の比較や入試成績と入学後学業成績との相関関係を検討するものが該当する。特に，指標Ⅱとして「入学後学業成績」が用いられる割合が高いことから,入学後の学生のパフォーマンスを評価する指標として重要視されている傾向がみられる。また，入試方法の妥当性検証という観点からは,従属変数として,同指標が用いられる傾向がみられ,入学後の学業成績が良い学生を獲得することが,妥当性の高い入試方法であるという見方が存在することがうかがえる。

一方，指標Ⅱにおいて 2 番目に多い「学生の意識・活動等の調査結果」は，入学後の学業成績とは異なる評価指標である。「入試区分」との関係では 16 件が該当しているが，その内の 13 件が AO 入試に注目した分析である。これは，AO 入試が「受験生の能力・適性や学習に対する意欲,目的意識等を総合的に判断しようとする…(省略)」(大学審議会,2000)といった性質を有するゆえに，入学後の評価指標も学生の意欲や目的意識を検証するものにならざるを得ないことが主な理由であろう。

その他の組合せは,各大学および学部等の実情に合わせたものが多い。分野別でみると，医学系において，前述した医師国家試験の合否という結果が重要な指標になっている。また，理工系では，大学院進学率などが含まれる「卒業後進路」を評価指標に設定しているのが特徴的である。

3.5 代表的な分析結果

前節では,追跡調査で用いられる指標にどのようなものがあり,どのような視点から分析しているかを整理した。こうした分析結果から得られた代表的な知見は，以下の 4 つにまとめられる。

① 「入試成績」と「入学後学業成績」には相関関係がみられず，むしろ調査書の評定平均を中心とした「高校成績」の方が，入学後の学業成績を予測している。

② 大学入学後の学業成績において,一般教育課程および教養教育といった学業成績と専門教育の相関関係は強く，その後の進路(大学院進学など)にも一定の影響力をおよぼしている。そして,好成績を修める者の特徴は,入試成績上位者というよりも入学後のモチベーションや勉学に対する高い意欲を持つ学生である。

③ 医師国家試験の合否に影響力があるのは，入試成績そのものではなく，入学後の学業成績が大きな要因となっている。属性別にみると現役生が相対的に優秀な成績を示し，推薦入試は，現役生を獲得するために有効な方法だといえる。

④ 入試区分別による比較結果からは，次のような特徴がみられた。

- 一般入試では，前期日程および後期日程入学者の入学後の成績に大きな差はない。
- 推薦入試での入学者は，他の入試区分の入学者よりも相対的に優秀である。ただし，大学の設置形態，推薦入試の方式(指定校，公募制，夜間コースなど)，その時々の競争倍率といった各種条件によって状況は様々である。

・ AO 入試入学者の入学後学業成績は，他の入試区分の入学者と比べて遜色ない。また，彼らは受験する上で大学のことをよく調べ，高い学習意欲や積極性を持って入学する傾向があり，入学後の満足度も高いという事例もある[4)]。

4 まとめ

本研究では，個別大学における追跡調査に注目し，『大学入試研究ジャーナル』に掲載された報告をレビューした。その結果，全ての大学や学部にとって汎用的な追跡調査の方法や共通的に援用できる分析結果はほとんど存在しないということが分かった。つまり，それぞれの大学や学部が置かれた状況に則した形でのアプローチが求められるのである。その中で，少なからず共通性の高いものについて3.5節で代表的な結果をまとめたが，課題点も含まれる。

その1つが①に関するもので，いわゆる「選抜効果」の問題である。倉元(2008)によれば，「選抜に用いられた成績は不合格者の入学後の成績というものが存在しないので，受験者集団は予測的妥当性が高かったとしても，見かけ上，入学後との相関係数が小さくなる。選抜に用いられない指標は選抜による影響が小さい。したがって，相関係数を単純に比較して選抜資料の妥当性を判断するのは明白な誤りである」とされる。今回の抽出論文で，「入試成績」および「高校成績」と「入学後学業成績」との相関分析がなされたものは，全部で43件(のべ数)あり，その内20件が選抜効果に配慮したものであるものの(うち,4件は選抜効果の修正公式を適用)，23件は選抜効果が意識されずに結論が導き出されている。こうした追跡調査の技術的問題に配慮せずに入試方法等の改善がなされれば，時として自らが意図しない方向へ舵が切られるリスクを持つ。本稿では，選抜効果の問題を取り上げたが，その他にも入試場面における同様の問題は多く存在する(平野,1993)。入試研究特有の問題点は，同研究に携わる者にとって共通知として認識されるべきものであろう。そうでなければ，今後も生産的とは言えない議論の繰り返しを招く可能性も否定できない。

一方，②の結果は，ほぼ全ての追跡調査おいて共通した結論であった。つまり，入試成績や入試方法の違いが大学卒業時点までのパフォーマンスを予測することが極めて困難であることを意味している。これは，ある意味当然のことで，仮に，入試成績や入試方法の違いによる影響が卒業時まで存続するのならば，「大学教育とは一体何なのか」という違う次元での問題提起になろうかと思われる。

以上の点を踏まえたとき，1つの視点が示唆される。大学教育の前半期における学習成果と後半期の専門教育等における学習成果において一定の相関が認められることを前提とするならば，前半期の大学教育を充実させることが，大学教育全体からみれば重要な鍵を握るポイントとみることができる。特に，入学初年次に行われる教育を高大接続の観点から捉え直すことは，大学入門科目に留まらないリカレント教育も含めた初年次教育の在り方を議論する上で必要な視点となるだろう。となれば，入学時における学生の学力面，意識面を含めたレディネス(readiness)の把握は，大学教育全体を考える上で不可欠な要素となるではなかろうか。

入試区分や入試成績,高校成績といった指標Ⅰに含まれる情報をはじめ,指標Ⅱに含まれる(アンケート調査等による)学生の意識・活動等の調査結果など,追跡調査に用いられてきた情報は,レディネス把握のための不可欠な情報となりうる。従来は,入試方法の妥当性などの検証のために,こうした情報が利用されてきたが,今後は,入学後の教育支援のために有効な情報として活用可能な形でフィードバックされることが期待される。ただし,入試成績や高校での履修状況および学生アンケートの回答も含め,すべての情報を学生単位で把握するためには,情報収集の工夫(例えば,アンケート回収率アップ)や個人情報の保護など配慮すべき点は多く,一筋縄でいかないのも事実である。しかし,こうした課題を1つずつクリアしながら,あくまでも学生の教育にとって役立つ情報が得られるような追跡調査を実施することは,結果的に何が初年次教育において必要なのかを明確化することに繋がる。ひいては「何をどの程度学んできてほしいか」(中教審,2008)というアドミッションポリシーを策定するための具体的な視点ともなりうるだろう。こうした教育的活用を前提にした入試研究が,今後蓄積されていくことを期待したい。

注

1) 国立大学入学者選抜研究連絡協議会は,2006年度より,公立大学,私立大学も含めた,「全国大学入学者選抜研究連絡協議会」(以下,「入研協」と略記)となった。
2) 「平成21年度大学入学者選抜実施要項」以降,「選抜方法」という表現が「入試方法」という表現に統一されているため,本稿でも入試方法と表記する。
3) 大学入試研究ジャーナルに掲載されたものとして,渡辺・福島(2008)の研究があるが,AO入試の追跡調査に限定されている。また,高野(1994)は,各大学の追跡調査を整理しているが,レビュー論文というよりは,研究プロジェクトの報告論文に位置づけられる。
4) 上記,渡辺らの報告を参照されたい。

参考文献

中央教育審議会 (2008).「学士課程教育の構築に向けて(答申)」.文部科学省.

大学審議会(2000).「大学入試の改善について(答申)」.文部省.

林篤裕・伊藤圭・田栗正章(2008).「大学で実施されている入試研究の実態調査」『大学入試研究ジャーナル』18, 147-153.

平野光昭(1993).「国立大学の入試に関する常識と非常識」『名古屋大学教育学部紀要-教育心理学科-』40,4-14.

倉元直樹 (2008).「追跡調査のスタンダード-柳井・及川・伊藤・萱川・菱沼・堀内・伊部論文へのコメント-」『大学入試研究ジャーナル』18, 177-178.

鴫野英彦(2003).「国立大学におけるアドミッションオフィスの系譜」『高校と大学のアーティキュレーションに寄与する新しい大学入試についての実践的研究』. 平成14年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A)). 研究課題番号 12301014.(研究代表者)夏目達也.研究成果報告書,301-31.

高野文彦(1994).「研究プロジェクト“大学入学者の特性と選抜方法との関連

についての追跡調査研究”の最終報告」『大学入試研究ジャーナル』4, 74-81.

渡辺哲司・福島真司(2008).「公表データからみる AO 入学者の評価-国公私立16 大学からの追跡調査報告レビュー-」『大学入試研究ジャーナル』18, 131-136.